





紅匂う
小糸のぶ

東方社

う　　にお　　くれない
　　句　　紅

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和四十二年六月十日発行

定価四五〇円

著　　者　　小　糸　の　ぶ

発　　行　　者　　石　渡　磨　須　子

製　　版　　者　　内　田　柳　次　郎

東京都文京区目白台二丁目七番一六号
発　　行　　所　　東　方　社

振替東京五七七七四番
電話（九三）四五一〇四番

(印刷・邦文堂印刷所)

長
篇
小
説

紅^{くれない}

匂^{にお}

う

小

糸

の

ぶ

紅
匂
う

奇 禍

残るおもかげ

嵐の中に

東京へ

何処に

ある偶然

運命の糸

めぐり逢い

風冷たく

156 135 110 87 70 53 39 19 5

娘	求	後	京	偽	陥	詭	白	夜
道		援	都	り			い	の
成		者	へ	の			ド	職
寺	婚			言	弁	計	レス	場
				葉				

388	369	339	323	293	253	227	202	180
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

装
幀

玉
井
ヒ
ロ
テ
ル

奇 禍

一

高木伸吾は運転してきた車を、その京都風の土塀をめぐるした門の前に停めると、いま旅館を出しなに拭いてきたばかりのフロントガラスを、もう一度丹念に拭いた。

濃いグリーンの、五六年キャデラックである。

拭き終ると、彼は薄茶色の背広の上に、ほこりよけに着ていた白っぽいバーバリのレインコートを脱ぎ、助手台の方へまるめておいてから、降り立つて車を点検するようにひと回りした。それから、「よし！」

と、大きくうなずくと、五尺八寸は十分ありそうな長身をかめるようにして、三津田宗平と表札の出ている屋根門をくぐった。

手入れのよく行き届いた深い植込みの間の玉砂利を踏んで、広い式台付きの古風な玄関先に立つた伸吾が、案内を乞うと、出てきた年輩の女中が、伸吾をひと眼見るなり、まあ！ という顔つきになつて、

「あんだ、またお越しやしたの？」

「たびたび伺つて恐縮ですが、なんとかお願い出来ませんか」

いいながら、伸吾は、昨日も通じておいた、モービル商事株式会社、外車販売部、高木伸吾、の名刺をまた新しく取り出して渡した。

「ぜひお目にかからせていただきたいんですが……せつかく東京からきたものですし、もし御主人の御都合がわるければ、秘書の方でも結構ですが……」

「さあ」

女中は困つたように首をかしげた。昨日の朝、東京からわざわざやつてきたという、この若い自動車のセールスマンの訪問は、昨日の午前と、ひる三時過ぎと、これで三回目である。二度も引きつづいて面会を拒絶されているのに、男らしく引緊つた線の、一種精悍とも見えるその顔に、昨日と変らぬ明るい微笑をたたえているのを見ると、女中はそのねばり強さに感心し、同情もしたのである。

「ほんなら、ちよつと伺つてくるさかい、待つてておくれやす」と、奥へ入つて行つたが、間もなく戻つてきて膝をついた。

「お嬢さまがお会いしますさかい、どうぞあがつておくれやす」

「お嬢さんが？ それはどうも、ありがとう」

伸吾はさすがに声をはずませた。京都の本邸に静養中の、繊維界の大立者といわれる三津田宗平の令嬢が、父親の公的にも私的にも、有能な秘書役であることを人伝てにきいていたからである。

女中に案内されるままに、玄關脇の、これもひどく古風な、だがどつしりとした調度類が、今風の洋風に見られない落着きと典雅さをただよわせている広い応接間へ通つた伸吾が、窓ぎわの椅子に腰をおろしていると、待つ程もなくドアの外に軽い足音が止まつた。

二

女中が紅茶を運んできた。

伸吾は浮かしかけた腰をまたおろした。

「どうぞ……あなた、ほんまにこんのええお人どすなア」

女中は紅茶をすすめると、改めて感心したように伸吾の顔を眺めた。

「いや、どうも……おかげさまで……」

てれくさそうに伸吾は笑った。笑うと、男らしく引緊った顔がどこか子供っぽくさえ見えて、真白い清潔な歯が若々しい。

十分ほど待ったと思うころ、ドアが開いて、パッと燃え立つような朱色の、新鮮な初秋の半袖のワンプーをスラリと着こなした令嬢が姿を現わした。

「これは、お嬢さまですか」

あわてて腰をあげた伸吾が、名刺入れを取り出そうとするのを、切長の眼がふつふつと笑つて、
「拝見したわ。モービル商事の高木さんね。あたし、三津田敬子よ」

と、大様にいつた。京なまりがないのは、しよつちゆう父親について、東京へ行っているせいだろう。輪郭のはつきりした近代的な美貌だが、言葉つきにも態度にも繊維界の大立物、三津田宗平の令嬢、といった権高さがほの見えている。

「早速ですが、こちらの御本邸で御使用になつておられる車が、最近故障なさつたとか聞きましたので、ニュー・カーをごらんいただきたいと思ひまして、持つて伺つたんですが……」

「さすがに商売柄、早耳ね」

敬子は予期していたらしく、軽く笑つた。

伸吾は、この令嬢が父親の秘書役でもあるし、父親が眼の中へ入れても痛くないほどに愛しているとも聞いているだけに、この高慢とも見える令嬢にうまく取り入つておけば……と、持前の職業意識が知らず知らずのうちに働いた。

「いかがでしょう？ 今月はじめに入つたばかりのキャラクターですが、御門前においてありませうから、ごらんなさいませんか」

「そうねえ、でも、いま修理中のも使えないわけじゃないんだし、父もまだ当分それを使うつもりで他の二、三の会社からのお話も実はお断りしたのよ」

「はア、ごらんいただくだけで結構ですから……たしか、お宅さまのは五四年のビュイックだと伺いましたか……」

「そう、スーパーよ」

「まあとにかく、五六年キャデを一応ごらん下さい。自動車としては最高のところへきていると思いますから……」

「冷房もついているのね？」

「はア、もちろん、ボディ・スタイルも、五四年あたりとはすっかり変つております」

「見せていただいても、あたしの一存にはいかなることよ」

念を押すようにして立ち上つた令嬢の身体から、その拍子に、高価なフランス香水らしい匂いがほのかにただよつた。

三

「あら！ いい車ね」

女中に靴を出させて、伸吾と肩をならながら門前へ出た敬子はそこにおいてある車を見るなり、ひと眼で気に入つたような声を出した。

「色もいいわ、パパの車黒だけど……」

「黒も上品ですが、お嬢さまには少しお地味ですし、この色でしたら、あまり派手というわけでもありませんから……」

「この車で、東海道をずつといらしつたの？」

「はア、なかなか好調でした」

二人ならんで立つと、敬子も背が高い方だが、伸吾はそれよりも四、五寸は高く、スポーツマンらし

いがつしりした身体に、薄茶色の背広がよくうつつて、キリッとした緊つた容貌をいつそう引き立たせている。

「ボディ・スタイルも飛行機なみね」

「はア、外観も変りましたが、冷房、暖房はもちろんのこと、電気ボタンのスイッチ一つで、窓も軽くあきます」

伸吾はドアをあけて、内部を見せながら、スイッチを押してみせた。窓は音もなく軽くあいた。敬子はハンドルへ手をかけながら中を覗き込んで、

「ああ、これ、サングラスになつてゐるのね。これじや運転するのにまぶしくないから、楽ね」

「はア、雪のときなど、全く反射しませんから……」

「やつぱり、これもノークラッチね」

「お嬢さま、たいへん車のことにお詳しいようで……」

「ふつふふ、たいしたことないわよ」

「キャデは五〇年以降は、全部ノークラッチになつておりまして、エンジンはもちろんV8、エンジンをかけると自動的にオイルがまわるようになつてゐるのが特徴のひとつです」

伸吾は、なんとかしてこの令嬢に車を気に入らせたいと一生けんめいだつた。

「まあ、他にも、シボレー、オールズ、ダッジなどありますが、先ほども申し上げましたように、もうこれは、車としては最高のところへきておりまして、改造の余地はないほどに進歩していると思いますが……お嬢さま、いかがでしょう？　もし御都合がよろしかつたら、どこか試運転のお供をいたしますが……」

「そう、いいわね」

あきらかに気持の動いたらしい敬子は、

「じゃ、ちよつと、断つてくるわ」

と、駆け出して行つた。間もなく戻ってきた敬子を見ると、黒茶色のスラックスに、薄い同系色のセーター。赤いカッターシューズという颯爽とした服装に着かえていた。

「どうぞ……」

運転台へ坐つた伸吾は、敬子はその横へ乗り込んで腰をおろすのを待つて、セルを押し、エンジンをかけた。

四

南禅寺に近い三津田邸から、すべるように走り出した車は、早川町をぬけて、粟田口にさしかかった。

「お嬢さま、どつちへ行きましょう？」

「そうねえ」

敬子は、ハンドルを握つたままの伸吾をチラッと見上げて、

「この道を左へ折れて、まっすぐに行つて頂戴！ 山科へ出るから……」

いわれるままにハンドルを切ると、間もなく、京津線に沿つた広い道路へ出た。左手に大津行の電車が走っているのが見える。

「お嬢さま、いかがですか？ 車の調子は」

「いいわねえ、クッションもいいわ」

「なにしろ、グラスにいっぱい水を入れて、持つていてもこぼれないという定評があるくらいですから……」

「それ、あなた方の宣伝文句でしょ？」

「いやア、どうも……かないませんア、お嬢さんには……」

車は坦々とした道路を音もなく、まるですべるよう走つて行く。窓の外をかすかに色づきそめた木本がかすめる……。

「ちよつと、あたしに運転させて！」

「え？」

伸吾はアクセルをゆるめながら敬子の顔を見返した。

「運転の経験がありますか」

「あたし、仮免許持つてるのよ」

「しかし……」

「大丈夫よ、ほら……」

敬子はズボンのポケットから取り出した仮免許証を伸吾の前に示した。家を出るときからそのつもりできたのだろう。自分の写真の貼つてある、実地だけの仮免許証だった。

「ね、あたし、練習所へ半月ほど通つたのよ。だから、免許証を持つてる人が横にいれば、運転してもかまわないでしょ？」

「それア、まあそうですが……」

「心配なさらなくても、あたし、運転には自信があるのよ」

自信たつぶりの顔つきで、そこまできわめられると、伸吾ももうそれ以上は拒めなかつた。

「いやア、これくらいの高級車になりますと、どうしても慎重になりましてね……」

弁解するようにいつて、車を止めると、伸吾は敬子と席を入れかわつた。

敬子は馴れた手つきでギアを入れた。車は静かに走り出した。

「なかなかお上手ですね」

「ふつふつ、それほどでもないわよ」

得意げにいいながら、敬子是一段とスピードを増して、九条山の駅前もいつきに走り過ぎた。

「もう少しアクセルをゆるめたら？」

そう伸吾が注意したときだった。不意に、横道からフラフラと車の前へ現れた人影に、

「あッ！ 危いッ！」

と叫んだ伸吾が、反射的にハンドルを切り、ブレーキに足をかけたのと、パタンと人の倒れたらしい音と同時にだった。

五

「あッ！」

敬子は真青になつたまま、気も転倒したように、茫然としている。

伸吾は素早く車からとび降りると、そこに仰向けに倒れている人のそばに駆け寄つた。六十過ぎらしい、きものに角帯をしめた、実直そうな老人である。

「だ、大丈夫ですかッ！」

声をかけながら、抱き起そうとして、伸吾はあわてて手を引つこめた。見たところ、どこも怪我はないらしいが、老人はすでに気を失っている！

脳震蕩だけだろうか、それとも、もしや内出血でも？ と、思うと、外傷がなくて脳に内出血を起している場合の怖ろしい例を、商売柄よく知っているだけに、さすがの伸吾も内心うろたえる気持だった。

「お、お嬢さん！ 早く……手を貸して下さいッ！」

怒鳴るようにいうと、車からはようやく降り立つたものの、すくんだように伸吾の後に棒立ちにな

つていた敬子が、蒼白の顔をおずおず覗かせた。

「大丈夫かしら？」

さすがに声がふるえていた。

「とにかく、病院へ……足、足の方をそつと持つて下さい」

伸吾は静かに老人の上半身を抱き起すと、敬子に足の方を持たせて、後のシートに運び入れた。

「どこも怪我はないようだけど……」

運び入れながら、敬子はどこにも外傷がないらしいのを見てとつたのだろう、ややほつとしたようにつぶやいた。

「いや、ひよつとして、内出血をしているかも知れませんから……」

外傷よりも、その内出血の方が怖ろしいのです、とは伸吾もさすがに口に出せなかつた。敬子の蒼白な顔が、恐怖にふるえながらも、外傷がないということに、必死にすがりついて、少しでも安心したがつているよう受けとれたからである。

気がつく、遠くからこの場の様子を眼にしたらしい数人が駆け寄つてきて、車の中を覗き込んでいる。

「病院は？ お嬢さん。どこの病院へ行きましょう？」

「府立病院へ……まつすぐに車を返して下さい」

伸吾はハンドルを握ると、静かに車をまわして、いま来た道を引き返して行つた。

敬子は、床に膝をついたまま、じつと、気を失っている老人の顔を見まもっている。

ひよつとして、内出血を起していたらと思うと、なにか不吉な予感で、いても立つてもいられない気持ちだつた。彼女は振り向いて、すがりつくような眼を、ハンドルを握つたままの伸吾の背にじつとみてた。

「かな江！　かな江！」

ふと、老人の口からうわごとのような声が洩れた。

六

色よく咲き初めて、紅をさすかに品よくなりよく、ああ姿優しやしおらしや、さつき、そうじやいな、そうじやいな……

「京鹿子娘道成寺」の唄につれてさす手引く手も鮮やかに、舞台いつばいに踊っていた西影菊加の美しい白拍子姿が、

花の姿の乱れ髪、思えば思えば恨めしやとて、竜頭に手をかけ、飛ぶよと見えしが、引きかずいてぞ失せにける……

で「鐘入」を略した、そのままの姿で鐘の上に登って見得になると、それまで息をつめていた観客席から、万雷の拍手がわき起つて会場をゆすぶつた。

ここは花見小路の歌舞練場——西影菊加こと藤川加奈江のはじめて開かれた舞踊会である。

一旦閉つた幕が開いて、舞台正面に立つているさつきの白拍子姿の加奈江に、舞台の袖から弟子らしい可愛い振袖の女の子が出てきて、花束を渡した。

また嵐のような拍手である。

加奈江はにやかな笑顔でそれに応えながら、この客席のなかにいるはずの父の顔をチラッと思ひ浮かべた。持前の遠慮深さから、どこか隅の後の方の席からでも、そつと覗いているのだろうが、きつと涙を浮かべてよろこんでいるにちがいない……。

拍手に送られて楽屋へ戻ると、

「先生、おめでとうございます」